NO.15

昭和58年（1983年）10月12日　水曜日　秋田さきがけ

社説

「カエル村」を現代社会に生かせ

仙北郡西仙北町大沢郷に「カエル村」が完成し、このほど開村式が行われた。秋田の自然とまごころに触れ、都会に住む人に命の洗濯をしてもらおうと、地元住民らが場所と労力を提供して建設したもので、今月下旬には初の入村者が訪れそうだ。

自然にカエル（帰る）、自己を見つめて考え方をカエル（変える）などの意味を込めている「カエル村」。同町の町民らの意図が、都会の人に"は一服の清涼剤になり、地元にとっては相互交流によって、何らかの活力の誕生へ結びつくことを期待したい。

自然に親しむことの必要性は、事あるごとに強調されている。「東京砂漠」という言葉に代表されるように、現代社会は人間関係がきすぎるし、精神的な余裕を失い、凶悪事件も増えている。都会ばかりでなく、実は農村部にも「東京砂漠」は入ってきており、心の砂漠化は今や捨てておけなくなっていると思われる。

九日朝、鹿角市で岩手県の一家四人が車で無理心中、焼死体で見つかるという痛ましい事件があった。車の中からサラ金のカード多数が見つかったなどのことから、借金苦が原因と警察では見ている。借金苦による心中や強盗事件は全国的に続発している。

その場合いつでも、なぜそれほどまでに借金を重ねなければならなかったのか疑問に感じられる。借金は実は誘惑的なものである。心が頽廃すると歯止めがかからない。背景に生活苦があるにしても、直ちに借金に走るやり方は垂直思考に過ぎるし、無理心中へと突っ走る思い詰め方も同様だろう。周囲がすっかり見えなくなっている。社会には相談相手になる機関もあるのだが、その立場にいれば水平に物事を広げて考えるゆとりがなくなるのだろうか。

このことはほんの一例だ。いろいろなケースで思い悩んでいる人は多いはずである。人生むしろそれは当然だと言える。それでも、大部分の人は心の"調整"をしながら生きている。

たまには物欲や金銭欲、激しい時の流れから離れてみることが、現代人には必要でないか。ただ離れるのではなく、代わりに没入するものが必要であり、そこに「カエル村」が登場する。

都会人は言うに及ぼす、自然に恵まれているほうの県民も、ふだんどれほど自然に親しんでいるだろうか。山や海などに出かける人は多いと思うが、シーズンともなれば有名観光地は人のラッシュ。都会の延長で、これでは「カエル」の作用は期待できない。

命の洗濯をし、自己を浄化するには、おのずとある雰囲気が必要である。それは"殺んだ"自然そのものだ。

西仙北町の「カエル村」では、動植物の観察、森林浴、気軽な山歩き、山菜やキノコ採り、川遊び、また希望者は農作業の体験もできる。同じ内容のものは河辺郡雄和町の「ふるさと村」でも行われている。自然豊かな本県にあって、県民はもっと積極的に自然と接することを考え、全国でも特異な県としての性格づくりを推進してもよいのではなかろうか。

自然に接することは、世事からの逃避ではない。自然に帰り、自己を見つめ、思考を広げることによって、常に問題を人間の側からとらえる訓練ができるに違いない。人生のいろいろな事態に対処できる幅もできてくるだろう。耐えることも知り得よう。ときに自然は、"心の"潤活油"にもなってくれる。

現代社会は価値観が多様化し、技術革新などの変化が激しく、神経の休まる暇がない。価値観の多様化は、本来多彩な個性の出現として歓迎されるべきだろうが、現状は道義的に無定見へと走っている気がしてならない。とくと自然に"聞く"必要があろう。

昭和58年（1983年）10月11日　火曜日　秋田さきがけ

自然との触れ合いを

「カエル村」の完成を祝う

西仙北町大沢郷

かやぶき小屋の前で「カエル村」の開村を祝い合う住民たち

仙北郡西仙北町の大沢郷地区で建設が進められていた「カエル村」が完成し十日、関係者二千人が出席して和やかに開村式が行われた。「秋田の自然とまごころに触れ、都会に住む人たちに命の洗たくをしてもらおう」と地元住民らが場所と労力を提供して建設したもので、すでに受け入れ態勢は万全。今月下旬ごろには入村者が自然生活を楽しむ姿が見られそうだという。

推進役は、秋田米をソマリアに贈り飢餓を救おうという「愛の一粒運動」で知られる佐々木正光さん（三三）＝同町刈和野二五、会社経営＝で"村長"は、山林を提供した地元の田村為治さん（六六）＝農業＝。開村式では、神主のおはらいのあと田村村長が「待望の開村式にてきつけ。うれしい限り。協力し合って発展させていきたい」とあいさつ。山道に張ったつたを、佐々木さんとともにテープカット。村の誕生を出席者たちと祝い合った。

続いて佐々木さんの案内で村の施設の全貌（ぜんぼう）が紹介された。建設地は、秋田空港から車で五十分。刈和野駅からは十五分の山間部で、標高一二〇㍍ほどの小高い山あいを切り開いた約四十㌶の山林。入り口から登るとすぐに炭焼き小屋と、広場には自然木で組んだテーブル、イスがある。敷策路は約八百五十㍍で桟線をめぐるコース。道の途中には所木の名札をところどころに下げている。炭焼き小屋から丘を二つ越えれば、田村さん親子がクリの木で組んだかやぶき小屋が見える。いわばむき出しの自然だが、炭焼きや納豆づくり、キノコ採りなどゃんだんな年中行事を盛り込んでおり「都会生活のアカを落としてもらうにはうってつけ」と佐々木さんは自信を持っている。

既に心の入村者の方は現在、東京などから徐々に申し込みがあるといい、ゆくゆくは、地元の人たちとの交流が実現しそうだ。